

第十六回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

秋山 駿 著『神経と夢想 私の『罪と罰』』

(2003年2月28日 講談社 刊)

秋山 駿 あきやま しゅん 昭和5年(1930)生まれ。東京都出身。専攻は文芸批評。早稲田大学文学部仏文科卒業。評論「小林秀雄」で第三回群像新人文学賞を受賞。日本芸術院会員、早稲田大学芸術功労者、文藝家協会常務理事。武蔵野大学客員教授(受賞時)。著作は、『人生の検証』(第一回伊藤整文学賞)、『信長』(野間文芸賞、毎日出版文化賞)、『内部の人間』、『歩行と貝殻』、『知れざる炎』、『舗石の思想』、『魂と意匠』、『片耳の話』、他がある。

受賞のことば

和辻哲郎文化賞をいただくことになって、私はひどく驚くとともに、光栄身に余るものを感じた。

私は敗戦のとき十五歳の少年であった。日本とはどういう国か、そして、日本はどうなるのか。なにか考えるための確かな土台が欲しかった。手探りしているとき出合ったのが、和辻哲郎『風土』である。

風土。これは確かなものだ。自分が、この風土の中の砂粒のごとき一粒の者として生き、生かされている、ということが、弱年の未熟な頭にも滲透した。

「芸術の風土的性格」のところには、「ところでドストエフスキーにおいて『東洋』の偉大な精神を讃えるということは・・・」という一句が出てくる。なるほど、そういうことか。私はドストエフスキー論をしたのではない。少年時に『罪と罰』を読んで青春の歩行を開始した、一日本人の心の歴史を綴ってみようと思ったのだ。

《選考委員評》

ふさわしい作品

陳 舜臣

秋山駿氏の作品が受賞作と決定した。

読んでいて、作者の熱の入れ方のすさまじさが気になるほどであった。十五、六歳のころ、「罪と罰」を読み、最初に読んだときの感動があまりにも大切に思えたので、数十年封印していたのを、いま読み返して、この『神経と夢想』を書いたという。

封印したあとの長い歳月に、作者が身と心に溜め込んだものの重さを思うとき、封印をはずしたときの、ほとぼしる力は想像を絶するほどの勢いをもってにちがいない。

この作品ははじめから終わりまで熱気がこもっていて、息苦しいほどである。ラスコーリニコフのそばに作者が検証者として密着していて、ときにはどちらが小説の主人公だか、検証者だかわからなくなることがある。この密着がこの作品の特徴といってよいだろう。

理由なき殺人ということで、小松川女高生殺しの少年がラスコーリニコフとくらべられるが、あの事件からだいぶ時間のたっている現在、もうすこし説明を要するのではないかという気がした。あるいは、作者が読者の層の拡大をそれほど望んでいないとすれば、こんな心配は不要であろう。

和辻哲郎文化賞には、一般部門と学術部門とがあり、私たちが選考委員として参加しているのは一般部門である。ところがこれまでの候補作品は、この両部門のいずれに属するか微妙なものがすくなくなかった。今回の一般部門の候補作品のなかにも、学術部門の候補とするほうがふさわしいと思えるものがあった。

秋山駿氏の「神経と夢想—私の『罪と罰』」は、作者の個性と観点が、きわめてはっきりしていて、作品のなかに秋山駿の色合いがあざやかすぎるほど出ている。選考会に出席するにあたって、この濃厚すぎる文芸色が、あるいはほかの委員に忌避されるのではないかとおそれたが、幸いにしてそれは杞憂であった。

和辻哲郎文化賞が一般部門も学術部門も、ともにそれぞれ特色を発揮して、さらに発展することを祈りたい。

梅原 猛

秋山駿氏の『神経と夢想 私の『罪と罰』』という本を読みながら、私は西田幾多郎の「悪戦苦闘のドキュメント」という言葉を思い出した。西田はこの言葉のように悪戦苦闘して、甚だ難解で深遠な哲学を創り出した。秋山氏のこの書も、西田とは少し異なった意味で甚だ難解で深遠な書である。

秋山氏は私とほぼ同世代であるが、若き日、ドストエフスキーにつかれたような青春時代を送った。秋山氏のドストエフスキーへの傾倒の程度は私よりはるかに強かったと思われるが、氏は二年の間、ほとんど人と口をきかず、ドストエフスキー的な世界の中で創造あるいは妄想の生活を送ったという。ところがこの青春のドストエフスキーへの耽溺以来、氏はドストエフスキーを読み直すことがなかったという。そして今、古稀をこえて、再びドストエフスキー文学の原点である『罪と罰』を読み直し、若き日のドストエフスキー体験を吟味しながら再びドストエフスキーと格闘したのがこの書であろう。

氏はこの長編の評論で、ドストエフスキーの『罪と罰』のみを論じる。氏の論じ方はまことに徹底していて、ドストエフスキーの一文一言を執拗に追究する。ドストエフスキーの天才をほめたたえる部分もあるが、ときにはドストエフスキーのような大作家たるものがこのような通俗な文を書くとは、と大文豪を叱責したりもする。このドストエフスキー論は、若き日の彼自身の体験の反芻でもある。そしてときにはそれがドストエフスキーの思想なのか、秋山氏自身の思想なのか、見極めがつかないところすらある。

もしも読みやすさが良書の条件の一つであるとすれば、決して読みやすいとはいえないこの書は失敗作といえるかもしれない。しかし古稀をこえて、あえてこのような悪戦苦闘の思想の冒険に挑む秋山駿氏に同時代の人間として強い敬意を表すものである。

中野 孝次

今回は近年になく読むに難渋するものが多かった。ただしそれは難解というのでない。

松澤和宏「生成論の探究」と、保坂幸博「日本の自然崇拜、西洋のアニミズム」は、こういうものがなぜ候補に上ってきたかが問題の二作。前者はフランスの生成論なる文学研究の仕方を輸入したもので、未熟。後者は著者の宗教についての考えそのものが問題というものだった。

有馬学「帝国の昭和」は調査がよくゆき届き、明快なものだが、全集の一巻であり、候補にふさわしからずということになった。

関川夏央「白樺たちの大正」は、明治十五年以後生れの青年群像、とくに白樺派を取り上げ、大正という時代背景の中に置いて、その特色を見出さんとしたもの。同時代の背景と人物が多く取上げられ、労作だが、これによって白樺派の文学と人物がどれだけより明らかになったか。その点に難ありであった。

秋山駿「神経と夢想」は、「罪と罰」読解といった力作で、著者が弱年にのめりこんだ「罪と罰」を、五十年後の今から追想して、当時の読みを再現しつつ読解したもの。あまりにも文学的すぎるとの難はあるが、とにかく体当りで、いかなる文学方法論にもよらず、自分の生をここに懸けて「罪と罰」を読んだというところに異様な迫力がある。「罪と罰」をわが体験として読み、読みほぐす。これが書かれて以来百数年間に、これだけ全身で、己れ一個の生存に懸けて「罪と罰」を読んだのは、東西を問わず初めてではないか。と同時にこれは「罪と罰」を籍りた著者の青春の自分史である。

表現が文学的すぎる難はあっても、そのひたむきな熱は大変なもので、賞に値するという点で三委員の意見は一致した。